

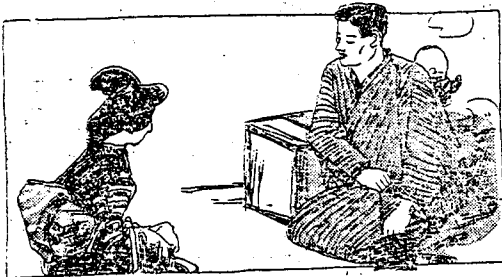


鳥籠 (六)

岡本綺堂

左らでも少佐に對する批難の聲が消えない中に、ついで夫人の家出といふ不評判が重つたので、彌七も坂町に居辛くなつた。こゝに住んで居ては坊ちやんを育てるにも都合が不良い考へたので、彼は翌年の春に現在の番町へ引越した。これと同時に彼の身の上は縁談が起つた。

彌七の同僚の堀口といふ男が彼の篤實なを見込んで、自分の近所に住んでゐる竹嶋といふ家の娘を彼の嫁に世話したいと云ひ出した。彌七も小さい妹一人では坊ちやんの世話も十分に届くまいと思つたので、結局その娘を貰ふことになつた。娘はお秀の云つて



其時廿一であつた。彌七は廿五であつた。

お秀は母のお安の弟の精太郎の三人家族で、他に一人の小僧を遣つて、下谷の西町で雜貨店を開いて居た。裕福云々ではないが、生計に困るやうな家でもなかつた。媒人の堀口は彌七の家の生計向も大抵察して居るので、この縁談が纏まるに共に、お秀の實家から幾許かの商品を通して貰つて、内職半分に此方でも雜貨店を始めたら何うだ、少くも家賃ぐらゐは稼げるであらうと云ふ意見であつた。これも双方に異存はなかつた。話は滑るやうに進行して、お秀は磯坂家の人になつた。

お秀の母は善い人であつた。弟の精太郎はまだ小兒扱いで別に何の邪魔にもならなかつた。お秀も正直な女であつた。殊に彌七に取つて幸福なことは、お秀が小姑のお照に非常に仲の好いことであつた。二人は實に血を分けた姉妹よりも睦じかつた。彌七は相變

らず會社に勤めてゐた。店はお秀のお照が引受けて毎月幾許づつか儲けてゐた。

斯うして四五年は平和に暮したが、その平和の空氣が又もや少しづつ、動搖を始めたのは、例の坊ちやんの問題であつた。英雄はお秀が縁付いた年から小學校へ通ふことになつたが、彼は恰も温順い兒であつた。彌七夫婦やお照にも能く愛してゐた。學校の成績も悪くなかつた。お秀も此の坊ちやんを厄介者扱ひにしてゐなかつた。が、唯お秀の腑に落ちないのは、毎年一度ぐらゐづつ、彌七の許へ幾許かの金を送つて来る人のあることであつた。

それは父の少佐から送つて来る金であつた。少佐も部下を連れて南洋へ渡つたものの、無資本同様の身の上では最初から大きな事業に取掛る譯には行かなかつた。勿論彌七一本で此地へ来て、十年の後には一筆の資産を作つた者もある。少佐等も末を樂みにして、差當りには他に雇はれて一種の勞働者同様に働いてゐるが、風土に馴れない爲に病氣に罹る者も多かつた。それ等の事情で、少佐からは中々十分の送金は能なかつた。それでも我子を忘れないと見れて、一年に兎も角も一三十疋ぐらゐは送つて来た。

結婚の當時、彌七はまだ氣心の能く知れないお秀に對つて舊主人の秘密を洩すのを憚つた。彼は後に至つて自分のべく其んな耻がましいことを聞かせるくなかつた。お照にも英雄にも秘密を守らうと誠めて置いた。お秀に對つても少佐は已に請州で戦死したやうに云つて置いた。彼は後に至つて自分の妻を欺いてゐることを心苦しく感じたが、今更取消すことにも能ないやうな羽目になつて、先づ其まゝに過ぎてゐた。その秘密も遂に暴露する時が来た。南洋から来る送金に就てお秀から執念深く問ひ詰められた結果、彌七も到頭正直に白状した。

「まあ、坊ちやんの阿父さんは捕虜になつたのさ。お秀の顔には嘲笑の色が泛んだ。少佐が捕虜になつたのは決して卑怯でなからうと云ふことを彌七は詳しく説明した。

「それはお照さんの邪推ですわ。お照は聲へ通つて辯護してゐるが、彌七は何うも自分の邪推ばかりでは無いやうに思つたので、時々にお秀に對つて其れを注意した。

「坊ちやんを大事にして呉れ。」
「決して疎略に致したことはありませんわ。」

お秀は何日でも斯う答へた。併し此の夫婦の間には、不知不識の中に噂い陳聞が出来た。



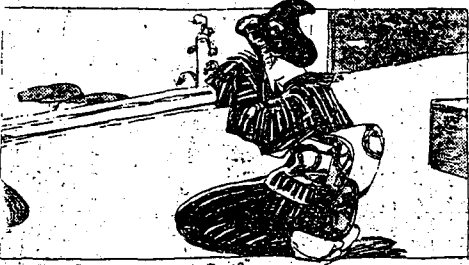
鳥籠 (七)

岡本綺堂

英雄は今年の春、小學校を滞りなく卒業して、神田邊の某中學校に通ふことゝなつた。今までの小學校時代は違つて、彌七の資力が俄に重くなつた。月謝ばかりでも三區取られる上に教科書も學校用品も以前よりは高い物を買ふやうになつた。其上に着せて食はせて小遣ひを渡しては、少佐から送つて来る一年二十十弗や四五十弗では到底引足りなかつた。これも幾分かお秀の顔色を悪くした。

それが結局、詰らないことから大い衝突を惹起すやうになつた。

英雄は小鳥や犬が好であつた。犬は見すゝけ許かの税金を取られるの



で何ふことが能なかつたが、英雄は友達須藤の家から竹籠に入つた一羽の繡眼兒を買つて来て、この正月頃から大事に自分で飼つてゐた。繡眼兒は四月頃になつて高音を張つた、其頃から英雄は神田の學校へ通ふやうになつたので、毎朝早く家を出なければならなかつた。随つて繡眼兒の籠を洗つたり餌を遣つたりするのは、お照が引受けることゝなつた。

お秀は生物を飼ふことを好まなかつた。殊に、鳥や繡眼兒のたぐひは毎日の世話が随分面倒なので、彼女は殊に思やがつてゐた。たゞ自分直接に手を下すのではないにしても、お照が毎朝忙しい中で面倒な生餌なごを拵へてゐるのを見るに、如何にも氣の毒なやうな、馬鹿々々しいやうな氣がしてならなかつた。三度一度はお照に對つて「好加減にしてお置きなさいよ。なご、云つた。それが又、彌七に取つては不快の一つであつた。

お秀は貝津少佐といふ人を全然知らなかつた。少佐が何んな人で、自分の

夫が其人に何んな思を受け、お秀も知らなかつた。お秀は夫の話を聞いた。夫では自分の頭には能く沁み込まなかつた。お秀の眼から観るに、英雄は要するに敵の捕虜になつた意氣地無しの人の子に過ぎなかつた。彼女が坊ちゃんに對して、夫や妹と同じやうな心を持ち得なかつたのも無理ではなかつた。而も彌七から云へば、それが確に不快の種であつた。

その繡眼兒が八月の某日に籠を逃けて了つた。當時お照も英雄も生憎に留守であつた。彌七も居なかつた。お秀もその逃げたのに氣が注かなかつた。時もあらうにお秀一人の時に、其鳥が偶然逃げた云ふのが、此に一つの面倒を醸す種になつた。

彌七はお秀の平生から推して、彼女が故意に逃したのではないか疑つた。お秀を詰問する詞も自然に暴くなつた。痛くもない肚を探られて正直な彼女は勃然とした。

「鳥だつて羽があるから飛んで行つたんでやう。」

「それだから籠に入れてある。誰か戸を明けなければ逃る筈がない。」

夫婦は漸次に云ひ算つた。二人の胸に纏まつてゐた平生の不平が一度に爆發した。お秀は夫に對つて、坊ちゃんが大事故か、女房が大事か云つた。彌七は坊ちゃんが大事故だ云へた。夫婦は既う離れ々々になるより他はなかつた。お秀は到頭實家へ歸つた。この籠を解くべき媒介人の堀口は一年前に既う死んでゐた。

彌七は英雄の爲に近所の鳥屋から果立の繡眼兒を買つて来て、再び舊の籠に飼つた。併し逃げた鳥は歸つて来なかつた。お秀も戻つて来なかつた。恰憫な英雄にも夫婦喧嘩の遠因は能く判らなかつた。だが、其の近因が自分の鳥にあることは明白な事實なので、彼は此の破裂を氣の毒に思つた。悲しくも思つた。

「お秀を何故歸して了つたの。僕も恨むから最う一度お秀を呼んで来て呉れないか。」彼は彌七に度々強請んだ。お照も姉さんを呼び戻して呉れ泣いて頼んだ。行き懸りで不意に別れて了つたもの、彌七も例の坊ちゃん問題を以外にはお秀に何の缺點も無いことを知つてゐた。さりして、自分の方から下手に出て、お秀を呼び戻すことゝ能なかつた。三人は二月ばかり寂しく暮した。暑氣は大溝の真ん中に段々に消れて、夜は石垣に響れる水の音に付くやうになる。家の中はますます寂しくなつた。お照は何だか心細くなつて、店番をしながら一人で泣いてゐることゝもあつた。

新刊雑誌

- ▲大正三年生籍検査所調査報告生籍検査所 (水鏡(九月) 府下西大久保水鏡社)
- ▲東洋學雜誌 (九) 牛込辨天町法華會
- ▲法學(九) 神田東洋學雜誌
- ▲實用新案公報(二七六) 有明町帝國發明協會
- ▲商標公報(二八五) 有明町帝國發明協會
- ▲富強世界(七) 神田東洋學雜誌
- ▲大日本紡績聯合會月報(二七六) 大阪江戸堀南通一同聯合會



鳥籠

岡本綺堂

その矢先へお秀の方から折れて出て母のお安が下谷から老の足を運んで復歸のこゝを頼みに来たのである。お照も喜んだ、準雄も喜んだ。彌七も別に故障を云はなかつた。

「坊ちゃんを大事にして呉れ。」
「これから必然氣を付けます。」
これだけの條件でお秀は再び番町の家へ歸つた。お秀は近所の評判も悪くなかつたので、隣の八百屋のお内儀さんも、向ふの靴屋のお婆さんも、再び彼女の顔を見たのを喜んだ。彌七の家も賑かになつた。お照は毎朝元氣好く鳥籠を洗つてゐた。
今朝も早く出た。この家でも拂ひ



が悪いので、一軒の金を集めるのに二度も三度も足を運ばなければならぬ。彼は朝飯を喫ひながら愚痴を云つてゐた。

お秀は壺所を片付けてゐた。お照は百頭の板橋を綺麗に掃いて、それから例の通りに鳥籠を持出した。毎朝彼女が籠を出すのを合圖のやうに、須藤翁が何時でも學校へ誘ひに来るのであつた。

「お早うございます。」お照は笑ひながら挨拶した。

「須藤君待つて呉れ給へ。今直行くから。」準雄は袴の紐を結びながら云つた。翁は店に腰をかけて鳥籠を眺めてゐた。自分の家で呉れた此の鳥籠が色々の波瀾を生んだことを彼は固より知らなかつた。

準雄は草包を肩にかけて出て来た。「お天氣は何うでせうね。」お照は陰つた空を覺束なさうに仰いだ。翁は

は傘を持つてゐなかつた。準雄も傘は要らないと云つた。
その聲を聞いて壺所からお秀が濡手を拭きながら出て来た。
「坊ちゃん。又あなたが濡れて歸つて被入る。お照さんや妾が吐られますからね。さうぞお傘をお持ちなすつて下さい。」
準雄は素直に洋傘を受取つて、翁が一所にすたく出て行つた。お秀は再び壺所へ入つた。お照は一心に生簀を摺り始めた。坊ちゃんは大切に相違ないが、其の坊ちゃんの爲に色々の氣象をする。嬢を彼女は氣の毒に思つた。
お照が鳥籠の始末を終つた頃には、路を行く人の足音が早くなつた。露のやうな細い冷いものがお照の顔へ時々はらくミか、つた。

「をや、もう降つて来た。」
彼女は慌て、鳥籠を掛けて、狭い店から溢れ出してゐる商品を片附にかゝる時、若い男が足早に入つて来た。彼は年頃廿一二の、色の白い小作りの、温順さうな商人風であつた。
「お早うございます。」
「まあ、精さん。お照は鳥渡狼狽へたやうに顔を赤くしたが、さあ、何うぞお上りなすつて……此の通り散亂してあるもんですから。」
「い、わ、私の家は猶大變ですよ。」
笑ひながら入つて来たのは、お秀の弟の精太郎であつた。姉がこゝへ嫁入した當時は未だ十五六の小兒盛りであつたが、今では立派な若い者になつて、店の方も自分が取仕切つて違つて行くやうになつた。まだ表向に斯ういふ約束した譯でもないが、將來はお照を彼の嫁にしたいと云ふ考へが周囲の人々の胸に孕んでゐた。常人達も薄々それを知らないでも無かつた。
精太郎は小さい折草包と風呂敷包を店の傍へ置いて腰を掛けた。今日は急ぐから此處で御免を蒙るに云つた。
「まあ、可いちやアありませんか。お上んなさいませよ。」
お照が顔に上れと勤めてゐる處へ、お秀も奥から出て来て、秀も角も鳥渡上つて行けと云つた。精太郎は断り切れないで茶の間へ通された。彼が奥へ入るに同時に、廿三四の女中風の女が塵砂と洗濯石鹸を買ひに来た。女の歸る頃には雨が餘ほ強くなつた。
「さ、御寛な。大變降つて来たよ。幾ら傘を持つてゐたつて、少し止まして行かなくなつちや仕様がない。」
お秀は起つて雨戸を閉めにかゝる。風も少し交つてゐるらしい。裏の空地の葉雞頭が濡れた頭を重さうに揺かし

てゐた。
「あ、さうさう。」精太郎は思ひ出したやうに店へ出て行つたが、忽ちあ、と低く叫んだ。
「お照さん。こゝにあつた草包を知りませんか。」
「さうしたら。」精太郎は不思議さうに眼を疑らせた。

第一萬一千五百六十二號 第三種郵便物可認

可認物便郵種三第 號六十二百五千一萬一第

草のの三書取道道兵れミ多不
口ぞ草のの三書取道道兵れミ多不